
戦う魔王様! ?

かりうむいおん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦う魔王様！？

【Nコード】

N0618Z

【作者名】

かりうむいおん

【あらすじ】

諸々の理由で、勇者一向に紛れ込んだ魔王様。しかしその勇者がアレな人で……。勇者×魔王だけこんな攻めでいいのか？、なこメデイ。一般向けですので性描写が入りそうになると、時間が吹っ飛びます。気楽に楽しめる話にする予定（未定）ですのでよろしくおねがいします。

血迷った選択（前書き）

イメージでは昔読んでいたような、少女漫画＋少年漫画＋BLなコメディです。疲れたときに読むと元気になる話を目指す予定です。

一般向けBLの方が良いのかなと最近書いていて悩んだので、こちらにも投稿することにしました。

はじめは設定の関係上、ちよった暗めかもしれませんが。

血迷った選択

「久々の獲物だ、逃がさないぜ！」

「キャ——！」

悲鳴を上げて逃げ惑う美少年約二名。

それを追い掛け回す剣を腰に下げた変態。

ちなみに、この変態は勇者である。

「H A H A H A、捕まえたぞ！。さあこれから俺と一緒に愛の楽園

へ……」

「……レオン、いい加減にしろ！」

そう、カノンは魔法の杖で勇者レオンを殴って気絶させた。

とりあえず、逃げ惑っていた美少年には、すみませんと謝り、勇者レオンを回収していく。

そして、気絶したこのアホ勇者をずるずると引きずりながら宿へと戻る。

この分だと地面との摩擦でまたズボンが破ける事になるだろうが致し方ない。

お金の管理をしているカノンには頭が痛い話だ。

——何故僕がこんな事を……。

幾度となくした自問自答を再び繰り返し、カノンはうんざりする。答えは決まっている。

それはカノンが勇者レオンの“幼馴染”だからだ。

——やっぱりアレだ。事前の下調べを面倒だったからしなかったのが敗因か。

初めて会った時、結構骨のある奴でこいつなら良いかも、と思ったのに。

なのに、まさかこんな奴だなんて。

幸いカノンの事は“幼馴染”だからだろう、対象外なので口説いたりはしてこ無い。

カノンはフードで顔が見えないようにしているが、本当はきらめくばかりの美少年なので真つ先に口説かれると予想される。

なのにそうならないのは“幼馴染み”フィルターのおかげだ。

そしてそもそも、勇者本人が自分で言っていたのだから、間違いないだろう。

はあとカノンは溜息をつく。

いかんせんこの勇者は弱過ぎる。

というか、美少年やら美少女やら美熟女やら美しき紳士やらを口説く前に剣の練習をしろと。

あの時は、もっと強い勇者だと感じたのに。

とんだ見込み違いだ。

はあと再び溜息をついて、宿の扉を開ける。部屋には勇者の仲間がいるはずだ。

カノンは魔法使いとして彼らの仲間の一員をしている。

ついでお金の管理も。一番カノンが安心出来るからと、勇者レオンに渡された。

その時カノンは思った。

こいつの安心出来るは絶対信用しないと。

もう一回カノンは溜息をついた。

現在勇者達は魔王を倒す旅に出ている最中だった。

ちなみに、カノンは魔王である。

呻くように頭から血を流し睨みつける勇者。

すでに他の二人の仲間は、瀕死の重症だった。

そんな絶体絶命の勇者を、魔王カノンカースは不敵に見下ろした。魔物の瞳である金の瞳に宿る冷酷さと傲慢さが見て取れる。死神とも言えそうな黒い衣装に、銀色の長い髪。

恐ろしく整った美しい容姿が、更にかの魔王の恐怖を引き立てていた。

「何だ、お前はこの程度か？」

「まだ……俺はまだやれる！」

勇者はふらつきながらも立とうとして、膝をつく。既に勇者も限界だった。

その様子に魔王は嘲笑う。

「無理をするな、人間。元々人間が我ら魔王に勝とうなど、思いあがりも甚だしいのだ」

「……く、それでも、俺は……勇者として……」

「他にも多くの勇者がいるのだ。お前が倒れた所で代わりは幾らでもいるぞ？」

「……だからといって、ここで……諦めるわけにはいかない！」

そう、最後の力を振り絞るように勇者は剣を振り下ろした。

それを馬鹿にしたように魔王は笑い、結界で防ぐ。

その結界にはじかれて勇者が転がった。再び起き上がろうとするも、既に勇者にはそんな力は残されていないかった。

魔王が勇者の前にかがみ、頭を掴む。勇者の口から血が零れた。赤い血。

魔王は魔物としての衝動で、勇者の口を伝う血を舌で舐め取る。

それに僅かに勇者が目を見張り、魔王を凝視する。その様子に、魔王は笑う。

「……なんだ？、頬が赤いぞ？」

「……るさい、一体……何の真似だ！」

「旨そうだったので、舐め取った。それだけだ」

「！」

「非常に美味だったぞ？、お前の血は」

魔王は艶かしく勇者に微笑み、そのままもう一度その血を舐め取った。

そしてゆっくりと顔を離し、右手で勇者の頭を掴んだ。

それが痛かったのだろう、勇者が苦悶の声を上げた。

「さて、お前の記憶を少し読み、書き換えさせて貰う。なに、全てではない。それに、ちょっとした拍子に元に戻ってしまうものだから」

ら、それほど恐れるものではない」

「止める……やめ……」

必死に勇者が声を搾り出す。けれどそれに魔王は薄く笑みを浮かべるのみ。

「今のお前の力では勝てないと分かっているだろう？。なに、次に目を覚ました時には、この事は忘れている。そして僕の事を仲間の一人だと思っている事だろう。ふむ、お前の幼馴染に魔物とのハーフが……しかも死亡している？」

「やめ……違……」

「ではその者に僕は成り代わろう。短い間であろうが、よろしく」

「やめる———！」

そう叫んで、勇者は意識を失った。

その間に魔王は記憶の書き換え、および治療を仲間ともしてやる。

そして、瞳の色を、片方だけ金のままもう片方を青色に変化させて、魔法使いのような出で立ちに魔王は変装する。

元々、昔の話だが人のふりをしていたことがあるのだ。造作もない。

ローブのフードをかぶり、顔が良く見えないようにする。あまり容姿をさらすところくな事にならないのだから。

一通り変装が終わり一息つく。

そして倒れ込んでいる勇者を冷たく一瞥して、

「せいぜい利用させてもらうでしょう」

そう、魔王はにやりと笑ったのだった。

後になって思えば、それこそが運のつきだった。

血迷った選択（後書き）

つづきます

お前はすでに絆されている

「あ、カノンちゃんお帰りなさい」

柔らかいピンク色の髪の、美少女のような少年イオが何やら弓使いの大人しい青い髪の青年トランの背中に薬を塗っていた。

「トラン、頼まれれば僕が治療したのに」

「ははは、トランは魔物が嫌いだからね」

「僕は魔物扱いか」

実際そうなんだけどね、とカノンは心の中で舌を出す。

そこで、イオがカノンが引きずっている物体Xに目をやる。

「あれ、レオンまた誰かをナンパしてたの？」

「ナンパなんて可愛いものなのか、僕は時々疑問に思う」

「まず直球で、やらせて下さい、だからね。そんな事を言ったら普通逃げるよね」

「何であんな……」

「カノンちゃんは昔から一緒なんでしょう？。知らないの？」

「……ある日突然あなつてしまいました」

「きつと、カノンちゃんが振ったのがいけないんだよ」

「あのね、僕はそういう対象にならないってレオンも言っていただろう！。まったく……どうしてすぐに恋バナにするかな……レオン、逃げるな、正座」

「はい」

大人しく正座するレオンに、カノンはお説教を始める。

勇者として、というか人としての、最低限守るべき常識として考えられるものをくどくどと耳にたこが出来るほど何度も話さなければならぬ。

何が悲しくて魔王が人間に説教せねばならないのだ。

「……わかったか？」

「わかった」

輝くばかりの眩しいレオンの顔を見て、カノンは理解した。

こいつ、絶対に分かっていない。

そこで、レノンの顔が近づいてきて、カノンの銀髪に触れる。

一瞬どきりとカノンはしてしまう。

いや、だって、レオンもあんなふざけたりしなければ、意外に整った顔をしていて、綺麗な金髪で、空を映した瞳で……って、いや、アホ勇者だ、アホ勇者。

そもそも人間ごときに魅了されるなど魔王として風上にも置けない。

しかも、この軽薄な奴に。

「ほら、鳥の羽が付いていた」

レオンの手には、黒い鳥の羽があった。

「あ、ああ……取ってくれてありがとう」

「いや、見えたから。でもカノンは付けたままでも良かったかも」

「何でだよ！」

「だって黒がカノンには似合うから」

無邪気にレオンが言うその言葉に、カノンはぎくりとする。と、

「駄目だよレオン。黒が似合うなんて、黒は死と夜を想像させる。

かの魔王もそうだしね。好きな子にはそんな事言っちゃ駄目だよ？」

「うん、分かった。でもカノンは“幼馴染”だから」

「そっか、恋愛対象にならないかあ」

にまにまとこちらを見るイオ。

何だ、何が言いたいんだ。

それに、どうして僕が少しかかりたような気持ちにならないといけないんだ。

わけが分からない。

「……それより、近くで魔物が暴れているそうだから、それで賞金稼ぎをしないか？。でないとしたら宿に泊まれない所か、朝食が水だけに……」

「さすがに植物みたいに、光合成して生きていけないよな……。力

ノンも果物食べられなくなるし。今の時期、よく取れる果物があんまり無いんだよね……」

一応相槌を打つが、カノンは魔王というか魔族なので肉食に近い雑食である。

そのレオンの幼馴染の魔物とのハーフとやらは、魔族の中でも特に珍しい種族で、基本果物しか食べない魔物である。しかもその見目麗しさから、人にも魔物にも狙われるという可哀想な人型の種族だ。

もつともかの魔族よりも更に際立った美しい容姿をしているのが魔王を含めた高位の魔族だったりするのだが、それは置いて置いて「わかった。大切な“幼馴染”を飢えさせる訳にはいけないから、俺、がんばる！」

「そ、そうか、分かった。じゃあ、僕は依頼を受けてくる申請をしってくるから……」

そうほんのり頬を赤くして、カノンは部屋から小走りで行く。どうも調子が狂う。

ここ一週間ほど一緒に居ただけなのに、その度に、カノンはレオンの奇行に悩まされつつ、気が付けば突っ込み役をやっていた。

「えー、でもカノンちゃん、レオンのそういう役所だからね」

そうにこやかに笑うイオに、どう考えても記憶操作に失敗しているとカノンは気付いた。

だが今更記憶操作を再びするのも難しい。下手に齟齬が生じて、全てが台無しになっては元も子もない。

そもそも、何故にこんなイオという踊り子と、獵師のトランが仲間なのだ。

もつとこう戦いに強そうな者を仲間にするものではないのか。ちなみに仲間になった馴れ初めを聞くと、酒場で意気投合してこなくなったらしい。

「俺、実力でのし上るタイプだから！」

良い笑顔でレオンに言われて、そういつてが無いんだなとカノ

ンは理解した。

なので他に仲間を誘おうにも、レオンの奇行はすぐに有名になってしまい、そんな奇特な人間はいない。

もつと良識のある仲間がカノンは欲しかった。

ボケ役になりたい。でないと疲れる。

本当にレオンは変な奴だ。なのに、カノンがついもつと仲間を探してしまったりするのは、“幼馴染”という理由からだろうがレオンがカノンにとびきり優しいからだ。それにいい奴だし。

ああもう、自分は魔王だというのにどうしてこんな……。

カノンは、小さくやってられないと呟いて、その思いを振り払うかのように走り始めた。

カノンが部屋から出て行った後。

「それで、レオンちゃんは本当の所、カノンちゃんの事をどう思っているの？」

「どう料理してやろうかなと」

「……レオン、まだカノンちゃんを完全に捕まえていないでしょ？ とらぬ狸の皮算用、って言うじゃない？」

「確実に捕まえるつもりだから問題ない」

そうにつとレオンは笑ってみせる。

他の奴らを口説いているのも、全部カノンに気にかけてもらいたいためだ、と言ったらカノンはどんな顔をするだろう？。

「信じてもらえないんじゃない？」

「否が応でも信じざる負えない状況にもって行けばいい。俺はカノンが欲しい」

「……カノンは止めた方がいい」

「トラン、幾ら魔族が嫌いだからって……」

「あれは駄目だ。レオンも諦めた方がいい。辛い思いをする前に」
そんなトランに、レオンは、ははっと笑った。

「大丈夫だよ、あいつの事は本当に昔から知っている。だから大丈夫

夫なんだ」

それ以上、トランは何も言わなかった。納得していないなとレオンは思いつつ、さてと窓から顔を出す。

通りかかる人を物色してから、にやりと笑った。

「そこのお姉さん、ぜひ俺と……」

そこまでしかレオンは言えなかった。何処からともなく、兎の置物が落ちてきてレオンは気絶する。

それを見て、イオが思い出したかのように手をぼんと打った。

「そういえば、カノンちゃんがレオン対策魔法を設置したとか言っていた気がする」

いい嫁さんだねー、とイオは気楽そうに笑うも、すぐ傍のトランは元々の寡黙な性格もあるが黙ったままだった。

お前はすでに絆されている（後書き）

読んで頂きありがとうございました。

次回更新は未定ですがよろしく願います

森のきのこはご用心

何故ここにはキノコの魔物しかないのだろう。

先ほどから延々と現れては腰？、を揺らしながら踊るキノコを切ったり、ナイフやら矢で突き刺したり、火炎系の魔法でバーベキューにしたわけだが。

「よし、これでしばらく食事には困らないな！」

レオンが山盛りになった焼かれたキノコの前で高笑いする。

確かにこれだけの量があれば当分食事に困らないだろうとカノン
は思う。

但し、連続してキノコを食べる事に耐えられれば、の話だが。
そこでイオが残念というように首をふる。

「残念だけどそうもいかないんだ。それ全部毒キノコだから」

「え？ 本当に？」

「だよね、トラン」

「ああ、その類の魔物は食べられない。確か養殖しようとして間違えて毒キノコの魔物を量産して、手に負えなくなったから放置したとか何とか」

そんな事で魔物が増えたのかと思うとかノンは頭が痛くなる。

ちなみにカノンは魔王なので魔物が増えるのは喜ばしいはずなのだが、現在魔王である事を隠しているので力が使えない。

故に襲われる。

それを差し引いても、どうしてこんなに嬉しくないんだろう。

「じゃあどうした方が良い？ 毒物を放置していいのか？」

「……勇者としての力で浄化すれば終わりです」

「そういえば、俺、勇者だったな。忘れていた……カノン、嘘です。
だから杖を構えないで」

仕方が無いといったようにレオンが剣を構えて、そこでふとトランが何かを思い出したように言った。

「赤いキノコだけは、結構な高値で売れる。獵師の間では隠れた小遣いになる」

「じゃあ分けるか。宿代やら食費やら出るかな？」

ちよつとレオンは嬉しそうだ。そこで、ふとイオが気付いたように、

「トラン、これなんで高く売れるの？ 毒でしょう？」

「毒と薬は表裏一体。ただそれは、“大人”が嗜む物だ」

“大人”という下りにレオンが反応したので、カノンは杖で軽くレオンの背中をつついて牽制する。

しかしそんなレオンの行動など気付かず、イオが更にその意味を問いかける。

「……つまり？」

そこでトランがこぶしを握って言い切った。

「自分の中にあるエロ願望をひたすらしゃべってしまうという薬だ」

「聞いた事がある……。その薬により、数多のカップルが分かれたという伝説の……」

「ああ、恐ろしい薬だ」

そうトランは額の汗をぬぐう。

カノンは思った。こいつらがレオンについてきた理由が何となく分かった。

似た者だからだ。

となるとカノン自身も彼らに似ているという恐るべき事実がない。

それにそもそもそんな薬、どうでも良いじゃないか、

「……別に、エロ願望口走るぐらい、いいじゃないか。誰かを傷つけるわけでも無いし」

が、その言葉にレオンがやけに反応した。

「カノンは分かっている！ いいか、人間の脳内にある妄想が一番エロいんだぞ！」

だからどうした！、とカノンはツツコミ対願望を抑えつつ、そう

熱意を持って力説するレオンに、お前ならそうだろうなとカノンは溜息をついて、

「いや……頭の中にあるものを言葉なり、文字なり、絵なりで表そうとしても、その限界は存在する。そうでなければ言い間違いや聞き間違いは起きないはずだから……」

「うお、珍しくカノンがまともに話してる」

「……さっき散々説教した事を忘れてるみたいだから、もう2ターンぐらいお説教しとこうか」

「ああ、俺の繊細な心がそんなに怒られちゃうと硝子のように砕けちゃう！」

「繊細だったら少しは行動を改めろ！　うつかりこの前胃薬を買おうか迷ったじゃないか！」

胃薬常備の魔王ってどんなだよ、そもそも魔王って偉そうにしてればいいものなはずなのに、どうしてこうなった。

カノンは心の中でむせび泣く。と、

「ちなみに買ったのか？」

レオンがちよっと心配そうにカノンを見る。

心配されて嬉しいと思ってしまったカノンは、すぐさまその諸悪の根源がレオンだと思い出す。

なので少し恨めしそうに一言。

「……残金が」

「ごめんなさい」

「まったく……いつそ、レオンにそのキノコを食べさせて恥ずかしい思いをさせるかな。その方が薬になるだろうか……」

そこでイオが慌てたように口を挟む。

「だめ、カノンちゃん。それだけは絶対止めた方が良い！」

「イオ、でもそろそろレオンにお灸を……」

「もしもカノンちゃん、レオンにエロエロな感じで口説かれたらどうするの！」

「待て、イオ、何故俺が口説くのが罰ゲームになっているんだ？」

「そうだな。危なかった。イオ、ありがとう」

「……おい」

「どういたしまして。いやね、カノンちゃんにパーティ抜けられると本当に戦力的にきついからさ」

「……無視しないで」

「はは、それはどうも。でもイオの短剣の扱いは中々だと思っていますよ?」

「……あのー」

「本音を言つと、カノンちゃんの事気に入ってるから、いて欲しいなつて」

「わー、嬉しいですねー」

ちなみに記憶操作する前に、カノンはイオをフルボッコにしていたりする。

そんな考えをおくびにも出さず、につこりとカノンは微笑んだ。

そこで、耐えられなくなったのか、レオンが叫んだ。

「む・し・す・る・な——!」

その言葉と同時に、特に大きい踊るキノコの魔物が現れたのだつた。

「ふう、何とか倒したな。お?」

レオンの体が薄く光っている。

「これは……レベルアップの予感!」

カノンはこういう時は口に出さなくてもいいのでは無いかと思った。

一応黙って立っているだけで様になる容姿なのに、口を開くとどうして格好が悪くなるのだから。

そこでいつもと違い、白い粉がくると回って、

「あ、じゃあアレで。ええ、その技でお願いします」

そうレオンが独り言を呟くと、それは消え去る。

今までに見たことが無いので、カノンは問いかける。

「今の何？」

「ああ、技を覚えたんだ。どれがいいか選択したんだ」

「どんな？」

「うーん、強化系？、かな」

「どうして、？、がつく」

カノンは嫌な予感がしたのだが、そこでレオンがカノンに抱きついた。

「俺ようやくまたレベルアップしたよ、褒めて褒めて！」

「え、いや、あの……」

カノンは突然レオンに抱きつかれて、顔を真っ赤にしてどうしようかとおろおろする。

助けを求めるようにイオとトランを見ると、トランはいつも通りの無表情で、イオはにまにまと笑っているだけで助けるつもりは無いらしい。

「カノン、褒めてくれないのか？」

「……ああ、はいはい、いいこいいこ」

頭を撫でてやると、レオンは更に嬉しそうにカノンに抱きついてきた。

それが嬉しいと思う反面、カノンは、“幼馴染”に対する好意なのだろうと悲しくなる。

何で僕がこんな思いをしなくちゃならないんだ、これも全部レオンが悪いとカノンは心の中で思ったのだった。

森のきのこはご用心（後書き）

読んでいただきありがとうございます。今日はもう一回更新したい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0618z/>

戦う魔王様! ?

2011年12月3日16時55分発行